

副詞「大方」の意味変化

李 知 殷

一、はじめに

現代日本語における「大方（おおかた）」は次のように、二つの用法にまとめられる。下の（一）（二）は「大方の」という形で、「話の大部分」「世間一般の人」という意を表す。（三）は「五題中三題できた」という根拠から「（試験に）受かる」可能性が高いことを推量する副詞的用法として用いられている。

- （一）彼の話はおおかたのところは想像がつく。
- （二）（後書き）おおかたの御批判を仰ぐ次第である。
- （三）五題中三題できたのならおおかた受かるだろう。

『現代副詞用法辞典』一九八四・九六

従来の研究では、（三）のように「可能性が高いこと」を推量する副詞的なもの、特に文末の推量表現と呼応する陳述副詞として多く用いられるとされている。

一方、歴史的にみると、現代語には見られない用法がある。（四）は副詞的用法として、「全く見えない」という意を表しつつ、否定の語と呼応している。

- （四）すべて、蔬、おほかた見えず 『宇治拾遺』（二二二一頃）

以上のことから、本稿では、副詞「大方」が現代語に至るまでのような意味変化を経てきたのかについて考察する。

調査方法として、まず、調査資料のなかから「おほかた・おおかた・大方」を検索し、用例を収集する。その際、意味変化を考察するため、資料の性格と関係なくできるだけ多くの資料を扱う。（なお、詳細な調査資料については参考文献を参照する）

以下、これから挙げる用例の表記や現代語訳は『新編日本古典文学全集』（小学館）、『日本古典文学大系』（岩波書店）に従う。

二、「大方」の歴史の変遷

二・一 中古

『日本国語大辞典 第二版』での最も古い例は『万葉集』（八世紀後半）のものである。

(五) 大方は何かも恋ひむ言拵せず妹に寄り寝む年は近きを

「大方」に「は」を伴った形で、「普通なら恋しいことなどないはずだ」という意を表す。このようなものは『万葉集』に多数見られる。

(六) おほかたはたがみむとかもぬばたまのわがくろかみをなびけてをらむ

(七) 屋戸さすなゆめ何時までに生かむ命そおほかたは恋ひつつあらずは死ぬるまされり

中古の資料から、形態別に分けてみると、「大方の」、「大方+助詞（は、に等）」、「大方+なる」、「大方」単独で現れるものが見られる。このことからすでに多様な形として用いられたことがわかる。また、用例数をみると、「大方の」の連体修飾と「大方+助詞」の形で用いられることが最も多い¹⁾、この時期の中心的な用法として使われていたことがわかる。

まず、名詞的用法の「大方の」の形からみてみる。基本的に「事柄の量、範囲に占める部分が多い」または「事柄の質、関係、程度などが多い」という意を表す。(八)は「事柄に占める部分が多いこと」、(九)（一〇）は「だいたいのこと」という意を表す。(八)は「部屋の全体に香りが広がっている」、(九)は「だいたいの作法」、(一〇）は「女宮の姿のだいたいの様子」ということを表す。そして、「大方の」の例のうち、(一一)のように「大方の」の後ろに「世の（おほえ、響き等）」という特定な名詞がつくものが多い、世の中にかかわることを伴って世間一般的なることを表す。

(八) 几帳立て、君もいとをかしげにとりつくろひて、大方の香もいと香ばしげなれば、あやしくなりて、

『落窪物語』（二〇世紀末）

(九) 姫君の御ためを思せば、おほかたの作法も、ぢめこよながら、いとものものしくもてなさせたまへり。

『源氏物語 少女』（二〇〇八年頃）

(一〇) 同じ憂き世ならばさてこそあるべかりけれ、細かなる御容貌などやいかがあらん、大方の御ありさま、気高きものから、筋ことなるありさまどもなるをなど、

『狭衣物語』（平安後期）

(一一) わが身の心のうちこそ人に似ず心憂けれ、大方の世のおぼえは鹿つくべうもあらぬ身を、世にとりては痴れがましう見思ふ人あらん、

『とりかへばや物語』（一一八〇年頃?）

次に、「大方」に助詞「に」「は」「には」などがつく形である。⁽²⁾
(一二)は「大方」に助詞「に」が付いた形で副詞に近い用法であり、「普通に」という意を表す。(一三)は助詞「は」が付き、「誰かが真実を知っている」という可能性が高いことを表す。(一二)(一三)のように主に助詞「に」「は」を伴う例が多くみられる。

(一二) 女君も、大方にうち語らひて過ぎし昔だに心より外なることにて疎まれきこえしはあいなかりしを、

(一三) わが思ひ嘆きしよ、大方はだれかは知る人のありける、かくても、げにいとようありぬべきことにこそありけれ、
『とりかへばや物語』(一一八〇年頃?)

そして、形容動詞の「大方+なる」の形をみてみる。(二四)―(二七)は「大方なる」の形で、(一四)―(一六)は「普通・一般的なこと」を表し、(二七)のように評価の意味を込めて「いいかげんな状態」を表すものもある。

(二四) 又、この男、おほかたなるものから、とく、おかしきことは言ひけり。
『平中物語』(九五九―六五年頃)

(二五) 「なほ、世にある人の有様を、大方なるやうにて、聞きあつめ、耳とゞめ給ふ癖のつきたまへるを、さうしき宵居などに、はかなきついでに、

『源氏物語』(一四卷) (二〇〇八頃)
(二六) そのついでにも、「さる人や」と、ただ大方なるやうにて問ひたまふに、誰とさだかには言はねど、

『狭衣物語』(平安後期)
(二七) いとかる物嘆かしき身ならざらましかば、かかる大方なるありさまにては見ざらましと、さすがに、心苦しう思しやらるる所ともあれど、
『狭衣物語』(平安後期)

最後に、「大方」が単独で現れ、副詞的用法として用いられるものをみてみる。(一八)の「大方」は文頭に単独で現れ、「家の男主人ではないと、大声でくしゃみをするのはにくらしい」ということを一般的なこととして捉えている。⁽³⁾そして、(一九)のやうに「大体、私にこの世に生きているなどお考えのようだ」というふうに、推量の意味を表すものもある。

(一八) おほかた、人の家のをとこ主ならでは、たかくはなひたる、いとにくし。
『枕草子』(一〇〇一年頃)

(一九) 殿がちにおはするも、びんなき事とのたまはずれば、大方「世になありそ」となんめりと、むつかしければ、齋院に参りて、隠れあたまへり。
『狭衣物語』(平安後期)

目立つのは、(二六)の「ただ(ゝのみ)」のように、限定を表すものとともに用いることが多かったことである。「ただ(ゝのみ)」の他にも、「ばかり」なども用いるのがみられる。例えば、「大方の掟ばかりこそ」(『狭衣物語』)、「大方の世の響きさば

りこそ」(「とりかへばや物語」などの例がある。
以上、これまでみてきた中古の「大方」は様々な形として現れている。そのうち、名詞的用法の「大方の」、「大方」に助詞を伴った形が中心として使われていたことが確認できる。

二・二 中世

中世になっても前代からのものが引き続き見られる。特に、単独による「大方」の副詞的用法が急増し、さらに新たなものが見られるようになる。

(二〇一)(二〇二) はそれぞれ「大方の」の形であり、(二〇〇)は「普通の春」、(二〇一)は「だいたいの花」、(二〇二)は「一般的なもの」という意を表す。そして、(二〇三)は助詞「は」が付く形で、「だいたい住まいのやり方」という意を表す。(二〇四)は「大方なる」の形であり、「普通のように」と解釈できる。(二〇五)は、副詞的用法であり、「名人が工夫を尽くしたもの」と推量している。

- (二〇〇) ただ大方の春だにも、暮れ行く空は物うきに、況や今日をかぎりの事なれば、 『平家物語』(一二一九年頃)
(二〇一) 如月も半ばになれば、大方の花もやうやう気色づきて、梅が香匂ふ風訪れたるも飽かぬ心地して、 『とはすがたり』(一二三〇六年頃)

- (二〇二) 今はその筋のことなどつゆもかけず、大方の世の物語、内裏わたりのことば 『無名草子』(鎌倉初期)

(二〇三) 又、時のまの烟ともなりなんとぞ、うち見るより思はるる。大方は、家居にこそ、ことごとまはおしはかれる。 『徒然草』(一二三〇年頃)

(二〇四) ただ大方なるやうに、「御対面うれしく、御旅寝すさまじくや」などにて、『とはすがたり』(一二三〇六年頃)

(二〇五) 両目両足の並び給へる台には、金の盤、雁灯を逃げたり。大方、魯般、意匠を窮めて、成風、天の望に冷しく、毗首、手攻を尽くせり、発露、人の心に催す。 『海道記』(一二二三年頃)

副詞的に使われる「大方」には、前代からのものとして(二〇五)のように可能性が高いことを推量するものがみられる。一方、否定の語と呼応する陳述性が新しく見られるようになる。

(二〇六)は「茸が出る時期なのにまったく茸の類は見えない」ということ、(二〇七)は「御世話役の手伝いを頼んだが、ほとんど人数が集まらない」ということを、(二〇八)は「引き抜こうとしたが、全然抜けない」ということを表す。これらの例の「大方」は、それぞれ、「見えず」「参らず」「抜かれず」という述語(動詞)を修飾し、「ほとんど〜ない」という完全否定の意味を表している。

(二〇六) 九十月にもなりぬるに、さきさき出で来る程なれば、山に入りて茸を求むるに、すべて蔬(くさびら)大方見えず。 『宇治拾遺物語』(一二二一年頃)

(二〇七) たまたまの御奉行にて候へば、助け参るべき由を申しぬ。

大方人数参らず。『春の深山路』(一二八一年頃)

(二八) しばしかなでて後、抜かんとするに、大方抜かれず。酒
裏こととさめて、いかかはせんと惑ひけり。

『徒然草』(一三三〇年頃)

以上のように、中世の「大方」には、中古からの「大方の」「大方+助詞」「大方なる」とともに、単独で現れる副詞的用法に推量の意味を表すものが見られる。しかし、中古と違って、副詞的用法が中心となり、さらに否定の語と呼応する新しい用法が現れはじめるようになる。

二・三 近世

中古以降から見られるものが近世にも引き続き見られる。特に、中世のように副詞的用法が中心としていた。⁵⁾しかし、否定の語と呼応するものより推量の語と呼応するものが多くみられた。

近世初期の『日葡辞書』(一六〇三・六九七)の「大方」の項には「大部分」を表す名詞的用法として記述され、「Core v'ocatarano cotodena nai.(これ大方の事ではない)」という用例をあげている。次の(二九)(三〇)もこれと同じ用法である。

(二九) 高野山で見たらば堪忍もならう。又は京に来てよい事見
た目で、大方の事は」とけされて

『好色二代男』(一六八二年頃)

(三〇) カクテ三日も過ヌレバ、大方ノ食物味損ズ。

『孔雀桜筆記』(一七六八年頃)

そして、「大方+なる」の形とともに、「大方ならず(ぬ)」という否定形の形がこの時期に初めて現れる。「大方ならず(ぬ)」という否定形は、前代に見られる「大方+否定形式」といった共起性から発達した形であると考えられる。

(三一) 又の世までの咄の種にためして見給へ」と、ただしく書き付けける。その中に大方なる事にはおどろかぬ男進みて、人間にあいさつすることく、

『男色大鏡』(一六八七年頃)

(三二) 手を差してなやめる時、左右へ蛇の頭を出し、男どもに食ひ付きて、味を痛める事、大方ならず。

『西鶴諸国話』(一六や五年頃)

(三三) 酒まゐりて、二世までと約束のこと男奴、大方ならぬ因果」と、心底うち開けて語る時十太郎、見にははうれしき事をいさます、
『武道伝来記』(一六八七年頃)

また、少数であるが、形容動詞の連体修飾形である「大方な」というものも見られるようになる。

(三四) 「痛むか痛まぬか、切つてはみず。大方なこと問はつしやれ。ア小気味の悪い女郎ぢやと。」

『人形浄瑠璃・心中天の網島』(一七二〇年頃)

副詞的用法には、否定の文末表現と呼応するものが少なくなる一方、推量の文末表現と結びつく形が多く見られる。さらに、その呼応関係のバリエーションが広がっていくことになる。

(三五) 人々やがてとらへとどめ、引き出ださんとするに、大方引きぬかれず、からうじて引きあげたれば、気をとりうしなひけり。

『仮名草子集 かなめいし』(一六六二年頃)

(三六) これのみ平生思ひやり、「伊勢が心は歌の読み方にて大方かくあるべし。」

『新可笑記』(一六八八年頃)

(三七) 勤子の客せぬ病気は、大方が痔でがなあらうとわるずい

まはして、『浮世草子集 野白内証鑑』(一七一〇年頃)

(三八) こ、より外に家はなし。大方この内へはひつたに違いない。エ、誰ぞ来よかし。問ひたやと見やる先より。

『浄瑠璃・妹背山婦女庭訓』(一七七一一年頃)

(三九) すりや与茂作を殺したも。大方同じ奴と思はる、。見れば数か所の刀疵。

『浄瑠璃・碁太平記白石斬』(一七八〇年頃)

(四〇) こ、の内の火鉢ハ、大方、狸が狐の化だのだらう。

『古今秀句落し斬』(一八四四年頃)

以上のように近世の「大方」は主に現代とほぼ似たような陳述副詞として、推量の意を表しながら推量の文末表現と呼応していることがわかる。

三、近代以降の「大方」

近代以降における「大方」にもこれまでのものが引き続き見られる。これまでの用法である、「大方の乗客」(久保天随「鎮西遊記」『太陽』一九〇一年第四号)のような連体修飾形のうち、現代の用例から「N+の大方」の形が一例見られる。

(四一) 地上絵でいえば、溝の何本かは見つけたが、空から全体像を眺めた者がいない段階か。宇宙の大方は未知の「暗黒」が占めるとされる。

『朝日新聞』二〇一二年七月七日

そして、中古から現れた「大方+なる」という形は近代の資料からは一例も見当たらなかった。しかし「大方+ならず(ぬ)」という否定形は多数見え、頻繁に使われていることがわかる。(ただし、「大方なる」「大方ならず」という表現は、現代語の用例からは一例も見当たらなかった)

(四二) 「白井は大方ならず胸をば刺された」

小栗風葉「二腹一生」『太陽』一九〇一年一〇号

また、副詞的用法には、特に陳述副詞用法としては、近世と同じく否定の文末表現より推量の文末表現と共起するものが多くみられる。

(四三)「序の事に伺ひますが、子を食ひ物にして旨がる親が世間^に有りますが、大方^其家も菜食なのでせうな。」

無名齋「肉食と菜食」「太陽」一八九五年第二号

(四四)病人に切花を送るもんぢやないといふ、大方直にしほれるからだらう、下らない事を言つたものだ、

昭子「避暑する人の幸なき身の上」「近代女性雑誌」一

九〇九年第一〇号

(四五)大連の取引所事件に關係した政友會の黨員といへば姓名は書かずとも大方^{目星}がつくだらう。

「茶話」「太陽」一九二五年第七号

四、おわりに

「大方」は中古から多義語として名詞・形容動詞・副詞的用法が見られる。そのうち、副詞的用法は基本的に推量の意味を表すものから現れた。しかし、中世に入ってから否定の文末表現との結びつきが現れはじめたが、近世になって減少していく傾向が見られた。また、推量の文末表現と呼応する場合が多くなり、推量の「だらう」のほかにもさまざまな文末形式と共起するようになった。

そして「事柄の占める部分が多い」あるいは「普通・一般的」というような意味をもつ名詞的用法は現在まで使われているが、形容動詞の「大方なる・ならず(ぬ)」という表現は今回の調査範囲では確認されなかった。

今後は「大方」の類義語とされる「大概」「大抵」の歴史的变化を調べ、そこからみられる相似点・相違点について考察していきたい。

【資料】

- 「テキスト類」「万葉集」「日本靈異記」「古今和歌集」「落窪物語」「和泉式部日記」「更級日記」「狭衣物語」「栄花物語」「今昔物語集」「とりかへばや物語」「将門記」「無名草子」「平治物語」「徒然草」「正法眼蔵隨聞記」「平家物語」「建礼門院右京大夫集」「とはずがたり」「中世日記紀行集」「中世和歌集」「宇治拾遺物語」「沙石集」「太平記」「謡曲集」「狂言集」「義経記」「室町物語草子集」「歌論集」(以上、「新編日本古典文学全集」小学館、「日本古典文学大系」岩波書店)「コーパス類」(作品名は省略する)「日本古典文学大系データベース」国文学研究資料館、「CD-ROM版 太陽コーパス雑誌」「太陽」データベース「国立国語研究所」、「CD-ROM版」「近代女性雑誌コーパス」国立国語研究所、「朝日新聞データベース」
- 【辞書・辞典類】『日葡辞書』邦訳(一九八〇)岩波書店、『現代副詞用法辞典』(一九九四)東京堂出版、『日本国語大辞典第二版』(二〇〇二)小学館

【参考文献】

- 田和真紀子(二〇〇七)『「おおよそ」「おそよ」の意味機能の指摘変遷』『外国文学』五六、宇都宮大、一一一―一二八

仁田義雄（二〇〇二）『副詞的表現の諸相』新日本語聞法選書三、くろしお出版

注

- (1) 『新編日本古典文学全集』（小学館）に基づいて、上代・中古の作品から「おほかた・おおかた・大方」を検索した結果、五十五例が得られた。そのうち、「大方の」の形は二〇例、「大方+助詞」の形は一九例、残りの一六例は「大方なる」や単独の「大方」であった。つまり、「大方の」「大方+助詞」が大半数であり、この時期の主な用法であると思われる。
- (2) 助詞「は」「に」の他、「を」「も」が付いて名詞的用法として「大部分」を表すものがそれぞれ一例ずつあった。
- (3) 田和（二〇〇七）では副詞が文頭に単独で現れ、一般論であることを示すことを「文頭概括用法」と称した。
- (4) 『新編日本古典文学全集』（小学館）に基づいて、中世の作品から「おほかた・おおかた・大方」を検索した結果、一二二例が得られ、「大方」が単独で現れた形が半分以上を占めた。「大方+助詞」は二二例、「大方の」は二二例であり、「大方なる・ならず」は八例であった。
- (5) 『新編日本古典文学全集』（小学館）に基づいて、近世の作品から「おほかた・おおかた・大方」を検索した結果、一六六例が得られ、「大方」が単独で現れた形がほぼ半分で、「大方+助詞」は四〇例、「大方なる・ならず」は二八例、「大方の」は二二例であった。形容動詞の連体修飾も一例あった。

(い じょうん 大学院後期課程在學生)